

# 事故予防・再考

【連載第2回】

保育の安全研究・教育センター代表 掛札逸美 先生



## ●寝つきからおむけ寝！

新年度の前、今一番大切なことを書きます。新入園のお子さんたち、小さいお子さんは特に睡眠中の死亡のリスクが高くなります。また、死亡は預け入れ初期に集中しているようです。

医療上の理由がない限り、0歳児、1歳児はうつぶせ寝（胸がからだの下側になった状態）をさせない、寝かしつけ（寝つき）からおむけ寝にし、うつぶせになったらあおむけに。睡眠チェックをする。これを確実にお願いします（※）。



うつぶせ寝は睡眠中の死亡リスクを

「保護者が「うつぶせ寝にして」と言うから」。万が一その子が亡くなった時、親御さんは「私がうつぶせ寝とやったからです」と言うのでしょうか？

## ●製作よりも命が優先

睡眠チェックは単なる呼吸チェックではなく、ましてやSIDSチェックでもありません（SIDSはあくまでも死因名です）。睡眠チェックは、全身状態を観察し、その子のふだんの様子を学ぶ貴重な時間と考えてください。死亡リスクの高い乳児・2歳クラス（※）は一人、睡眠チェックとおむけ寝のための職員を配置しましょう。連絡帳書きや製作の片手間では、「早く終わらせよう」という思いが先に立ち、チェックがいいかげんになるからです。「仕事が終わらない」、連絡帳は不可欠でも、製作は減らせませんか？ 保護者に睡眠の安全の重要性と午睡時の状況を伝え、作業を大幅に減らした園も複数あります。

## ●早期発見で助かった例も

そして、数か月すれば水遊び、プール活動が始まります。国や自治体から通知が来ている通り、監視に専念する職員を一人置く、これが必ず必須です。早くみつければ、子どもの命を救える確率も上がり、万が一そのお子さんが亡くなっても、するべきことをしていたという点で職員の心と仕事を守ることができます。

水活動の横には、救急要請時の紙と携帯電話を必ず置きます（事務室に走っている時間はありません）。そし

掛札逸美先生プロフィール  
1964年生まれ。心理学博士（健康心理学）。NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表。

て夏前には、「子どもが沈んでいる」と想定して、発見から救急要請、心肺蘇生の練習をしてください。「監視をする」「心肺蘇生をする」…でも、異常がみつかった時に誰がどう動くかは想定・練習されていないのが現状です。

これは睡眠中に異常を発見した時も同じです。想定して、動き方を考え、練習しておく。そうでなければ実際の時に動けません。睡眠中、水活動中のいざれも、チェックや監視をしていたので早期に異常を発見でき、救急につなぎ、子どもが元気に回復した例は私のまわりにもあります。子どもの命を守り、園で働く人たちの心と仕事を守るためにトレーニングをしましょう。

※あおむけ寝と睡眠チェックの対象年齢は、自治体によって異なるので確認してください。自治体の指示に従っておくことが現状では最も重要です。

※「子どもが寝たいように寝させる」は大事。ならば一斉午睡自体、私から見ると奇妙です。ここで論じている話は、あくまでも「子どもの命と、職員の心と仕事を守ること」です。

★睡眠等について、詳しくはNPO法人保育の安全研究・教育センターのウェブサイトをご覧ください。

「自分で寝返りが打てるようになってから？」「苦しければ動くはず」…。保育施設では、1歳以上でもうつぶせで亡くなっています。今までこうした死亡は「突然死」（非原因不明）とされ、不問に付されることが多かったようです。今は違います。死因は調べればわかるようになってきています。なにより、うつぶせ自体が過失とみなされるようになってきています。

「うつぶせじゃないと寝ないから」。

あおむけにし続けられれば子どもは慣れると、あおむけ寝を習慣づけている園の保育士さんたちは言います（※）。ただし、療育上の課題がありそうなら、専門家に相談をしましょう。

「寝ついたら、あおむけにします」。実際は、「せっかくな寝ついたらんだから、そのままにして」ではありませんか？